



背景

平成13年（2001）9月5日夜から秋雨前線が停滞し、翌6日未明にかけて高知県西南部では集中豪雨が発生しました。土佐清水市の宗呂川の水位は急激に上昇し、川沿いの県道もまるで川のような状態になりました。この話は、川のようになった県道の向こう側にいるおばあちゃんを救出した駐在さんの話です。駐在さんとおばあちゃんの無言の会話に、お互いを思いやる気持ちが表現されています。

アクセス 下川口駐在所前

- 土佐清水市役所より西へ直線距離約12km
- 土佐清水市下川口
- 緯度経度 北緯32度47分05秒，東経132度50分28秒



平成十三年（二〇〇一）の高知西南部豪雨を体験した駐在さんの話です。
私はパトカーを高くなった所に移動させ、すぐに駐在に戻りました。すると、外線電話が鳴り出しました。電話に出ると「前のおばあちゃんを見に行ってください」と叫ぶような声が聞こえてきました。
私はすぐに駐在の向かい側に住む八四歳のあのおばあちゃんのことだと思いました。このおばあちゃんは心臓を患った^{わすら}独居老人で、いつも私に声をかけてくれるきさくな人です。この時、既に駐在所内の水深は一メートル位になっており、私は腰まで水に浸かりながら外に出て、おばあちゃんの家の方を見ました。するとおばあちゃんは自力で家から出てきたのか、家の前にある良心市（無人販売所）の棚につかまり、私の方を向いて必死に助けを求めて叫んでいました。

おばあちゃんの声は、雨と雷と付近の人の叫び声に^{かき}隠れ、私の耳に届くことはありませんでしたが、「駐在さん、駐在さん」と言っているように思えました。私はその姿を見た瞬間、無我夢中でおばあちゃんに向かって走り出していました。走り出すと言っても、駐在前の道路は既に私の胸の高さまで水が増えていますので、少しずつしか前に進めませんでした。

何とかおばあちゃんの元に^た辿り着き、おばあちゃんを右脇に抱え、胸の高さまで増水して濁流のようになった道を泳ぐようにして駐在へ向けて進みました。既に道路に足のつかないおばあちゃんは、私の負担をどうにかして軽くしようと、八四歳の体力を振り絞って足を動かし、言葉にならない声で私に何か言っていました。その声は聞き取れませんが、おばあちゃん目を見れば、何を言わんとしているのかが分かりました。必死の思いでおばあちゃんを駐在の近くの支所に避難させ、急いで駐在に戻りました。